

ISSN 0913-1213
Himi Shunjū

歴史・民俗・文化

氷見春秋

第33号

平成八年四月三十日 印刷
平成八年五月一日 発行

氷見春秋会発行

能登・加賀の地蔵半跏像

尾田 武雄

はじめに

今から十数年前に、砺波市の石仏調査の足掛かりに地元の石仏悉皆調査をした。その時、祖泉神社前の小堂に入っている古様で明らかに、近世仏で無い地蔵半跏像に魅せられた。

それから、砺波市史編纂に関わり市内の神社一〇社を調査した際に、このような地蔵半跏像を数体拝見した。その後、福光町の医王山文化調査に参加したり、また福野町の齊藤善夫氏のご協力で、安居寺の地主地蔵を拝見したりなどして、砺波地方では一二体を拝見することができた。

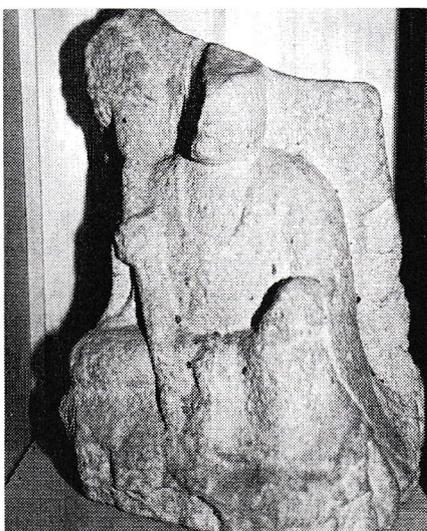
それから、石材が氷見地方で採掘されるシルト岩質泥岩ではないかということと、石動山信仰とそのなかにおける白山信仰との関わりから、氷見地方にもこのような地蔵半跏像が多いのではないかとの思いがあった。

そこで田中清一さんのご協力で、氷見地方の地蔵半跏像を探し求め、三六体を拝見した。そこでまた多くのことを、知り得たがそれ

上に多くの分らないことが出てきた。そこで石動山のある能登半島全域と、白山信仰のメッカ鶴来町の調査を行った。

能登、加賀の中世石造物の研究者故桜井甚一氏の業績をなぞるように調査した。その報告である。

1 散田地蔵



散田地蔵

散田地蔵のある志雄町は、能登半島の西側基部に位置している。この町の中央部に散田

地区がある。子浦川、新宮川、向瀬川が合流したところにあり、散田金谷古墳（国史跡）などがあり古くから開けたところである。

散田には、山岸、室野、金谷の三つの垣内があるが、そのうち山岸にこの地蔵がある。この地蔵は、元旧家で十村役であった山岸一郎宅（通称弥与ドン）にあったもので、現在は松浦繁男宅にある。これは元山岸地区にあった愛宕社のご神体といわれている。『石川県志雄町史』（昭和四十九年発行）によると「山岸愛宕社 藩政期には『氏神、釈迦・地蔵』となっており、山伏金性院が支配していた。明治の神仏分離のとき、それまでの神体であった本地仏は、山岸弥一郎に預けられた。現在、山岸一郎が所蔵している。」とある。その後山岸家は無住になり、近くの松浦家が保管することになったのである。

松浦家では、愛宕社のご神体として丁寧に管理されており、私が拝見したのが平成五年五月であった。桐箱の中に安置してあったが、光背の半分が欠け、頭部も右半分が欠落していた。それが非常に印象的であった。そしてまた、この地蔵の管理者の松浦繁男さん（明治四十一年生）談によると「頭が、欠けているのは魂が抜かれているためだ」との言葉にも、強い印象をもった。

2 福水地蔵

氷見市から、羽咋市へ抜ける主要地方道の県境近くに福水町がある。その飯山川南に白



福水地蔵

山社があり、その隣の「藤の森」と称するところに福水地蔵がある。

この「藤の森」には、多くの中世石造物がある。これは桜井甚一著「丹治山福水寺遺跡関連の造形資料」(『能登加賀の中世文化』)に詳しい。北陸地方で最古の弘安二年(一二七九)紀年在銘板碑や大日(金胎兩界)如来板碑などの紹介がある。これらは、元ころにあつた真言宗寺院の福水寺に関わる遺物とされている。

福水地蔵は、「藤の森」の石造物のなかの中央に鎮座している。散田地蔵と同じく、頭部の右半分が欠落している。

3 福水奥宮地蔵

福水町の白山社から東南二五〇メートルの坂を登ったところに同社の奥宮がある。桜井甚一著「丹治山福水寺遺跡関連の造形資料」(『能登加賀の中世文化』)によると、この奥宮には、平安時代後期の特色を示す木造如来

形坐像二体、鎌倉時代に造像された木造僧形坐像が安置されている。

この奥宮の境内には、五体の中世石仏があり、そのうちの一体が福水奥宮地蔵である。砂岩質で風化が激しいが、積極的な欠落はない。



福水奥宮地蔵

4 福野地蔵

志賀町の中央南部に福野がある。氏神である気多神社には、多くの中世石造物がある。

薬師堂には、鎌倉時代後期の日静妙法蓮華經碑などがある。この福野地蔵は、神社の境内にある。石川県全土の中世石造物を調査された故桜井甚一氏は出身地でもあり隈なく調査されている。その桜井氏が関わった『志賀町史』資料編第一巻(昭和四十九年発行)によると「舟形(上部欠損)に厚肉に陽刻した地藏菩薩半跏像で、高さ六五センチ、幅四二センチ、厚さ二五センチ。左掌を膝上に仰ぎ宝珠をとり、右手に錫杖をもつ。素朴な彫法で

あるが、その肉付きに室町時代前期の特色を示している。」とある。

石材は砂岩で、光背の右半分が欠落している。また宝珠と錫杖の頭部も欠落している。長い面相であるが、顔面そのものも若干削られている。



福野地蔵

5 明正寺地蔵



明正寺地蔵

志賀町百浦の真宗大谷派明正寺前の中世石造物郡の中にある。百浦は『角川日本地名大

『辞典石川県』によると、「地名の由来は古代、氏神百沼比古神社の祭人百沼比古命とその一族が、桃の木で作られた船に乗って当地に漂着し、村を開いたと伝承され、桃が浦から百浦に転じたという。」とある。

明正寺地藏は、光背上部が欠落しているが、顔面、宝珠は当時の原形をどうにか保っている。しかし、石材は風化しやすい青っぽい凝灰岩であり、やや小振りである。

6 相見神社地藏



相見神社地藏

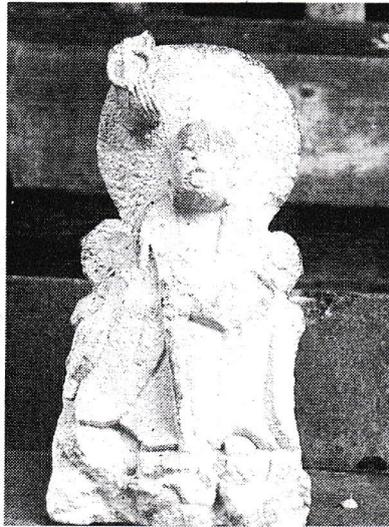
羽咋郡富来町の中央部に位置するところに相地区がある。また北端には信仰の山として知られた高爪山がある。その相神の相見神社の境内にこの地藏がある。

『富来町史』（昭和五十一年刊）によると「一石の石灰質細粒砂岩を材とした総高五七センチの地藏尊。頭光・身光から厚肉に彫出された地藏菩薩が、右手臂を屈して錫杖をと、左手膝上にして宝珠を持つ。右足を屈し、

左膝を立てて坐る半跏像で、能登地方のも鎌倉末期からかなり造像されている。本像は、像の肉付けなどから室町時代初期と認められる佳作で、保存の状態も良好といえよう」とある。

顔面がやや削られているが、保存状態はすこぶる良い。

7 剣神社地藏



剣神社地藏

珠洲市宝立町鶴島の剣神社の中に、この地藏がある。剣神社については『能登名跡志』に「此村の花神は乙剣大明神也。安養寺と云別当あり、昔は大社成りし由え又安養寺は今、金峰寺の境内にあり、毎年三月十五日三ヶ村祭礼にて、黒鳴八幡宮へ鶴鳴稲荷宗玄乙剣御幸あり、立物山など引き、にぎにぎしき也」とある。

この剣神社地藏に関しては『珠洲市史』第二卷（昭和五十三年刊）によると「総高四三・五センチ、幅二一・五センチ、石灰質細粒

砂岩。一石で、円光背・台座から厚肉に彫出した錫杖の一部分を欠失するほか比較的風化していない室町前期の佳作である。」とある。『珠洲市史』の説明のように保存状態はたいへん良く、顔面も案外きれいに残っている。

8 不動寺地藏1

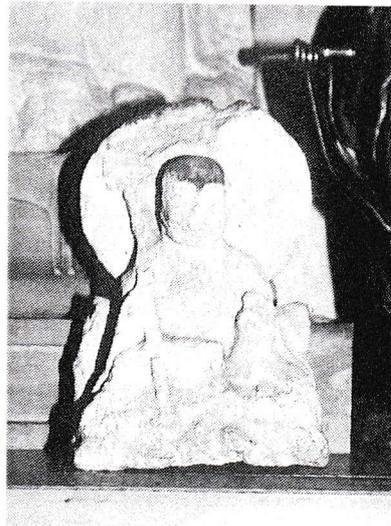


不動寺地藏1

珠洲郡内浦町は能登半島北部にあるが、その内陸部に不動寺地区がある。ここには、真言宗医王山不動寺があり、地名はこの寺にちなむものなのであろう。この不動寺については『能登名跡志』によると「医王山不動寺と云て密寺あり、光仁天皇第四の皇子智徳上人の開基、其比は天台宗にして七堂伽藍、木郎郷一郷寺領ありて、高倉院勅願所にして、数度の勅使論旨、院宣等ありて、坂本山王廿一社を移し」とあり、智徳上人を開基に据えるなど、石動山信仰の関わりを臭わすようである。

ところで、不動寺地藏1は、不動寺の本堂

不動寺地蔵1の前にあるもので、総高四一・五センチ、幅二六センチの小振りの地蔵である。円光背であるが、右上部が欠損している。また地蔵の頭部も欠損している。石材もシルト岩質泥岩である。



不動寺地蔵2

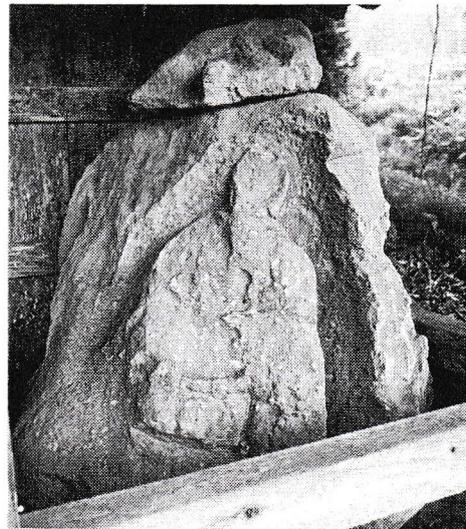
の中に安置されている。この地蔵に関しては『内浦町史』第一巻自然・考古・社寺（昭和五十六年発行）に「総高六一・五センチ、奥行二十・五センチ 右手に錫杖、左手に宝珠を持って岩座に坐る地蔵菩薩半跏像を厚肉に彫り出し、頭光・身光を刻む。中世の能登に盛行した石仏のうち古様の一軀に数えられる」とある。

この地蔵は、保存状態が非常に良く、錫杖、宝珠も完全な形に残っているが、顔面が若干けずられている。石材も氷見地方の古い地蔵半跏像の石材と同じようなシルト岩質泥岩である。

9 不動寺地蔵2

行延は町の中央部で、東流する九里川、尻川本支流の合流点の付近にあたる。戦国時代に、末次甚右衛門がいたといわれる行延城跡があったといわれている。その近くに「弘法の井」といわれるところがあり、その付近にこの地蔵がある。これは、巨石に三面にわたる仏像が彫り込まれてあるものである。一面には、地蔵半跏像、阿弥陀如来、そしてもう一面に仏像が彫ってありそうであるが、堂の蔭で拝見することができない。

ここに彫ってある地蔵半跏像、阿弥陀如来は、ほとんど原形を保っていないほど、積極的に破壊されているような感じがする。この



行延地蔵

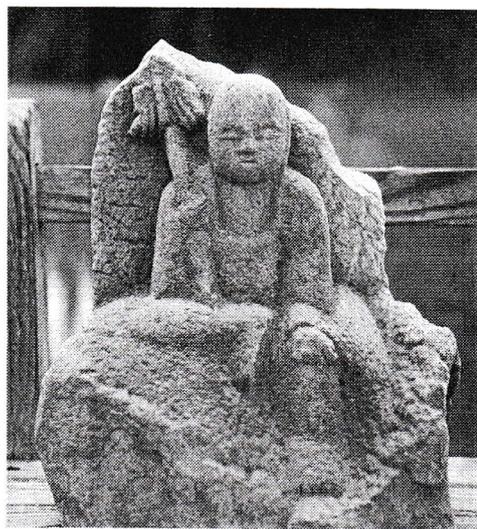
10 行延地蔵

ところで、この不動寺地区には、田の神を迎える神事のアエノコトの行事が今でも盛んで、国重要無形民俗文化財に指定されている。

石仏に関しては『内浦町史』第二巻近世・近代・民俗（昭和五十七年発行）によると「行延は木郎越えの上りの宿と言われる馬つなぎ所であった。地蔵堂の延命地蔵は、河中大明神と言われ、火をもらさない、鎮火地蔵といわれている。

ふなやちに行基が一夜にして作ったと言われる石仏がある。大自然石に三方こうじんを彫ったが、夜朝になり鶏がないたのでしあげぬままおいて行つたと伝え、その下に金ののべがねがふせてあるという。近くに弘法大師が彫って行かれた弘法井戸の清水がある。」という。延命地蔵の河中大明神とは、次に紹介する行延堂内地蔵である。

11 行延堂内地蔵



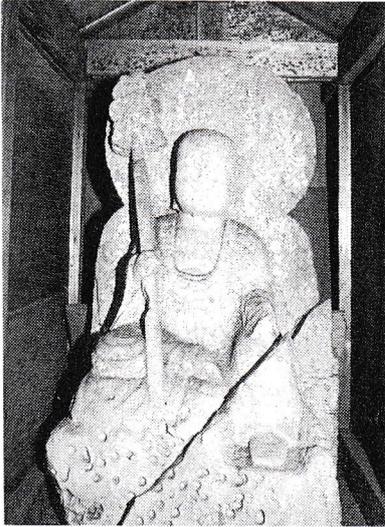
行延堂内地蔵

行延の柿尾神社近くの地蔵堂内にある。この柿尾神社は、もと木郎郷十カ村の氏神だつ

たといわれる由緒ある神社で、かつて元享三年（一三二三）の柿尾七社権現造立という棟札もあったといわれる古社である。ここはまた、旧街道木郎越えの登り口という交通の要所でもあった。

この地蔵は『内浦町史』第一巻自然・考古・社寺（昭和五十六年発行）によると「石材砂岩。総高（上部欠損）二八センチ、幅二三・五センチ、像高二二センチ。地蔵菩薩半跏像を厚肉彫りにした小像であるが、像容にまとまりがあり、ことに童顔の面相に親しみを感ずる。右手に持つ錫杖を付近の人は纏（まとい）と見立て『火伏せの川中大明神』と呼んで、程谷の川上大明神、弥勒院の川下大明神とともに信仰されてきたようである。」と伝承を記している。

12 神道地蔵



神道地蔵

鳳至郡能都町柿生神道（じんどう）の祭祀遺跡石仏山の入り口に、この地蔵が小堂の中

に鎮座している。この石仏山は県史跡で、山腹の原生林の中に巨石群があり、特に高さ三メートルの柱状の石が、両脇に小さな立石を従えて三尊形式に立てられている。これは、社殿建築以前の古い神道の形式を今に留めている遺跡とされている。

この地蔵に関しては『能都町史』第一巻資料編（昭和五十五年発行）によると「総高七二センチ、総幅三八・五センチ、像高四二・五センチ、膝張り二九センチ。石灰質細粒砂岩。円頂で、衣を着け、左手に宝珠（欠損）を捧げ、右手に錫杖を持って坐る地蔵菩薩半跏像を厚肉に彫刻し、頭光・身光を彫出する。この地蔵菩薩像は石仏山を背に、通称『薬師堂』と呼ばれる小堂に安置されている。石仏山は、古来女人禁制の霊地であるため、山麓に位置するこの石仏に女性の信仰を集めたようである。」とある。

石材は、シルト岩質泥岩のようである。作りそのものも、氷見や砺波地方のそれとよく似ている。

13 鮭尾地蔵

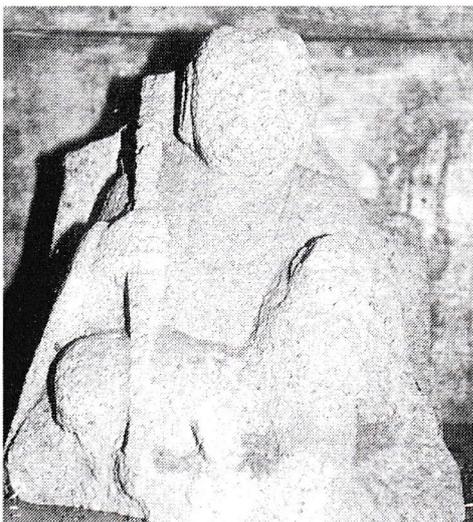
能都町鮭尾の道端にこの地蔵はある。『能都町史』第一巻資料編（昭和五十五年発行）によると「像高（現状）三九センチ。円頂で、左手に宝珠（欠失）、右手に錫杖（頭部欠損）を持って坐る地蔵半跏像を厚肉に彫出す。頭光・身光をわずかに残し欠失する。この石仏は、松井善次氏所有の水田の中の小祠に祀

られている」とある。これもまた石材は、シルト岩質泥岩である。像容も氷見や砺波地方のそれとよく似たものである。



鮭尾地蔵

14 別所地蔵



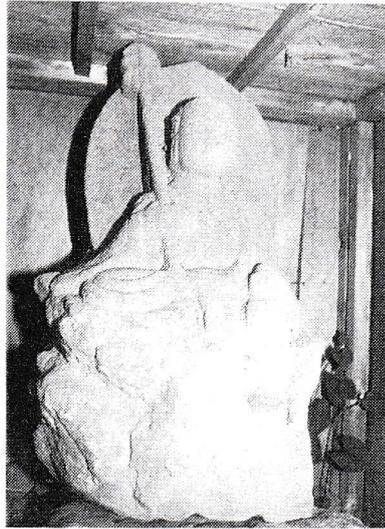
別所地蔵

鹿島郡中島町別所の橋爪家の小堂の中にある。造像年代は室町時代と推定されている。

(『中島町史・資料編』)

石材は凝灰岩である。像容そのものも、氷見や砺波地方とは明らかに違う。小振りながら岩座に坐している。光背や錫杖の頭部が欠損しているが、古様である。

15 鳥越地蔵

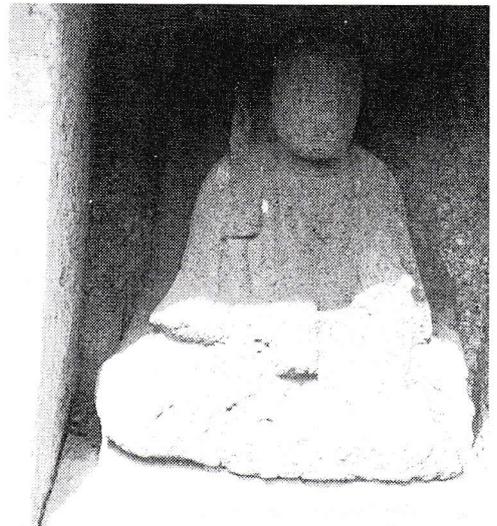


鳥越地蔵

鹿島郡中島町鳥越の道路端の小堂に安置されている。厚肉彫の地蔵である。造像は、室町時代と推定されている。舟形光背で保存状態はすこぶるよい。石材は凝灰岩である。

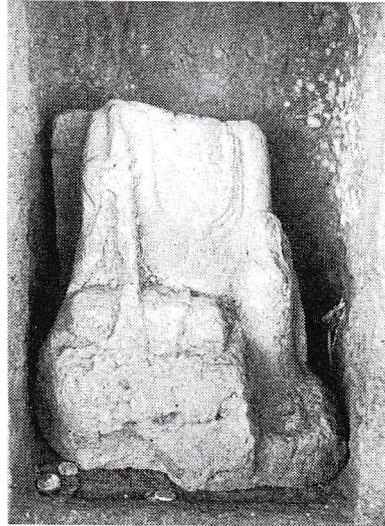
16 上出地蔵

鹿島郡中島町鳥越の上出にある。『中島町史』によると、「俄山往来と称する田の中の小道横に在る石室内に安置されている。厚肉彫りの地蔵尊。石質は凝灰岩で像高約一尺五寸(四五・五糎)造像の年代は室町時代と推定する。」とある。宝珠は欠落している。石材は14別所地蔵、15鳥越地蔵と同じである。



上出地蔵

17 横田地蔵



横田地蔵

中島町横田にある。これも『中島町史』によると、「総高三尺(約九一糎)の石室に安置されている丸彫りの地蔵尊。室町時代の造像と推定するが、頭部が欠損しているのが惜しい。近郷の人たちはこの地を虫ヶ峰の遙拝所とも呼んでいる。」とある。ここでは丸彫

りとあるが、厚肉彫りの浮彫りである。石材も凝灰岩である。

18 海門寺地蔵



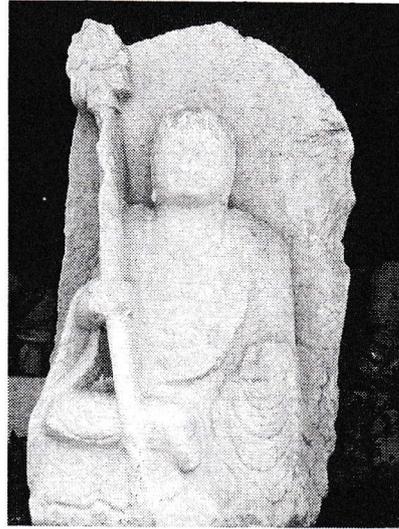
海門寺地蔵

海門寺は七尾市大田にあつて、山号を大龍山といい、釈迦如来を本尊にする曹洞宗の寺院である。徳翁寺末で開基および開創は不詳とされている。能登畠山氏の建立で、三千貫の地を寺領として寄進されたと伝えられている。中興開山は東岳受旭で、境内墓地に天正四年の銘のある東岳受旭の無縫塔がある。

この地蔵は、山門前の左側にあり、大振りの宝篋印塔の笠の上に露座で鎮座している。顔面がやや削られた感があるが、おおむね保存状態は良い。石材は、シルト岩泥岩であり、氷見、砺波地方にみられる像容と非常によく似ている。造立年代は、南北朝期頃に推定できる。

ところで、この海門寺の近くに熊野神社があった。詳しいことは分からないが、気になるところである。

19 上大田地蔵



上大田地蔵

河北郡津幡町上大田の京中にある地蔵である。これは、津幡町公民館刊『野仏』（平成四年）刊に報告されたものである、それによると「この地蔵さんは、通称『のぼりの地蔵さん』と呼ばれ、大昔、川に流れてきたのを拾い上げて祀ったと伝え聞いている。この場所は、共有地でもあり集落の人たちは『京中』と呼び、集落の入口である。」とある。

この地蔵は、主要地方道小矢部押水線縁にある。「川」というのは、大海川なのであろう。この地蔵は、シルト岩質泥岩で舟形光背の厚肉彫りであり、宝珠が少し欠損しているが、その他は保存状態は大変良い。顔面も削られた様子もなく、作られた当時の姿が保られている。造立年代は南北朝期に推定できるだろう。

この上大田の氏神は白山社である。

20 普正寺地蔵



普正寺地蔵

金沢市普正寺町の砂丘と犀川の水ぎわあたりで、昭和四十年の河川改修工事中に臨海集落遺跡が発掘された、それが普正寺遺跡である。その報告書『普正寺』（石川考古学研究会刊）が、昭和四十五年に発行されている。

そこでは「中世墓地の石造物」について、実際に、緻密な調査がされた。その中に、地蔵半跏像一体の報告がある。それによると、「この地蔵石仏は、本遺跡に出土した唯一のものである。石材は灰白色の凝灰岩を用いている。

石質に比して風化していないが中央部から横に折損している。しかし欠失部分は少なく原形に近い状態をみることが出来る。本石仏の様式は一石一尊石仏である。全体的な石材の形状はほぼ長方形で、高さ五七糎。幅下部三四・五糎、上部で三〇糎。厚さは下部で二一糎、上部八糎とする。表面中央に像高三二・

五糎の半跏姿勢の地蔵菩薩を、面奥七糎、膝

奥八糎の厚肉で彫り出ししている。像容の全体的な表現は瘠肥を感じない。衲被や袈裟の起伏は比較的大きく、波状の稜角に刀痕を認める粗略な彫刻手法である。面相は写実に基調をおいて表出されている。面長で、眉は切り込んだ線で美しい円弧を描き、眼は伏目で水平に長く、鼻梁は長くとおり、稍きつくも感じるが、口もとに柔らかな笑みをただよわせた個性的な表現がなされている。右手に錫杖を執り、左手に摩尼宝珠をもつ延命地蔵菩薩である。蓮華座や頭光など一切の莊嚴手法は施されていない。造像の年代は室町時代前期のものとして推定される」とある。

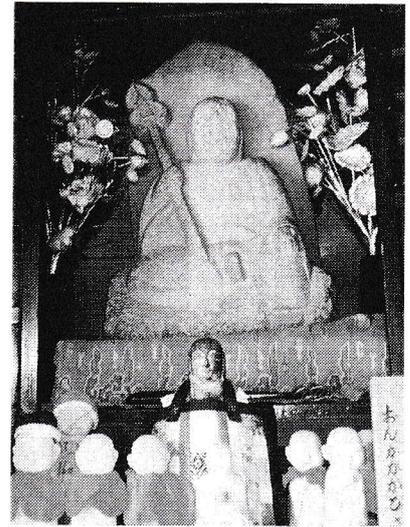
現在は、これら石造物などの出土品は石川県立歴史博物館に収蔵・展示されている。

ところで、石川県内での中世石造物は能登地方に多くみられ、加賀では、白山神社のある鶴来町のほかはほとんど見ることができない。ところが、この普正寺遺跡には多くの中世石造物があり、能登と白山とのつながりを意味するものと推察された。

また、「白山□□（迂宮料）カ」という墨書木片が採取されている。この木片から、普正寺遺跡のある金石港つまり当時の宮腰港は、白山と関わりがあることがわかる。このことは、水運を利用して、能登と白山との交流が盛んであったことも理解できる。

21 傳燈寺地蔵

金沢市伝燈寺町の臨濟宗傳燈寺に、この地



傳燈寺地蔵

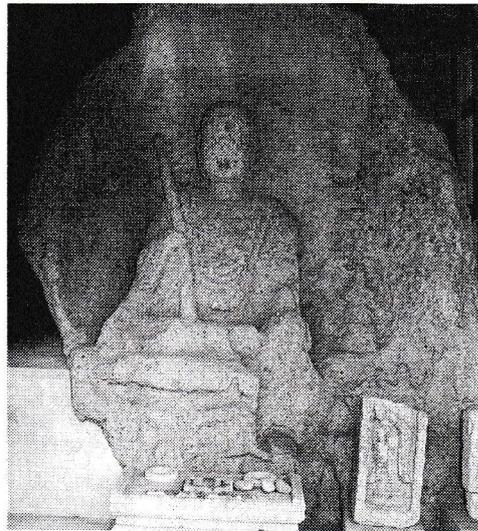
蔵がある。傳燈寺は山号は、瑞応山または宝亀山といい、恭翁運良を開山として法燈派の流れを汲む禅寺である。ここには「身代り地蔵」と呼ばれる地蔵がある。『加賀傳燈寺——歴史資料調査報告——』（平成六年発行）によると「舟形の光背をもち、左足を踏み下げた半跏形式の像である。着衣の彫り出しは浅い。右手に錫杖、左手に宝珠をもっている。錫杖の頭部は連結した環状となり、環内に塔婆形を造り出す。顔面は削られている。総高六〇センチ、台座六一・五センチ、同高さ一三センチを測る。像高四五・五センチ、膝張三二センチ、肩幅一九センチ、頭部幅一〇センチ、右側面をみると、台座の厚さ地二センチ、奥行二四センチ、光背の厚さ七・五センチ像は最も厚い所で一六センチ、頭部の厚さ九・五センチを測る。石材は凝灰岩である。」とある。

この「身代り地蔵」に関しては、『加賀志徴』などにその伝承などを記している。要約

すると、恭翁運良が地蔵堂で山賊に襲われたとき、地蔵が身代りとなって刀傷を受け、山賊は悔悛してその弟子となり、のち傳燈寺を継いで二代目住職になったというのである。顔面が削られているのは、その時の刀傷であるという。

砺波・氷見地方や能登半島に広く分布する中世の地蔵半跏像のほとんどが、顔面が削られているが、ここに残る伝承は貴重である。そして曹洞宗と白山信仰、曹洞宗と地蔵との関わりに注目される。

22 かたがり地蔵



かたがり地蔵

石川郡鶴来町は、手取川の中流でその扇状地の扇頂部右岸にある。古代から霊場白山の登り口として知られ、加賀一宮白山比め神社や金剣宮などがある。鶴来町そのものは、この門前町として開けたものである。

かたがり地蔵は、鶴来町白山町にあり、一宮駅から百メートルほど南へ行った道路脇の小堂に入っている。この石仏に関しての論稿は多くあるが本格的に取り上げられたのが藤原（京田）良志氏の「加賀・鶴来町の磨崖仏」（『史跡と美術』第二八〇号・昭和三年稿）である。

その後、京田良志編『日本の石仏5 北陸編』（京田良志氏は「北陸の磨崖仏」、桜井甚一氏は「加賀の石仏」）で詳細に述べられている。また『鶴来町史 歴史編』（平成元年発行）、林信一氏の「石仏の古里 鶴来」（昭和四六年発行）なども、地元からの報告がある。

これらを総合すると、かつてこの石仏は、手取川の渓谷にそそり立っていた、舟岡山の岸壁に彫り込まれていた磨崖仏であった。それが、明治三年から始まった手取川七ヶ用水の取水口合併工事に伴う道路新設工事によって切り取られ、現在地に安置されたものである。

またそこは、「妙法の石室」があつたところとされている。『加賀志徴』によると「此石室は、今神主町より鶴来へ出る往還脇なる、舟岡山の麓の塔の邊なる岩窟にて、岩に仏像を彫刻せり。此仏像かたがりたる故に、かたがり地蔵と称し、塔の邊ならば九重塔の穴ともいへり。此仏像は地蔵のさまに似たれど、能見るに地蔵にあらず。彼泰澄が像にて、此石室に行ひ居たる比、自ら彫刻したるよしい

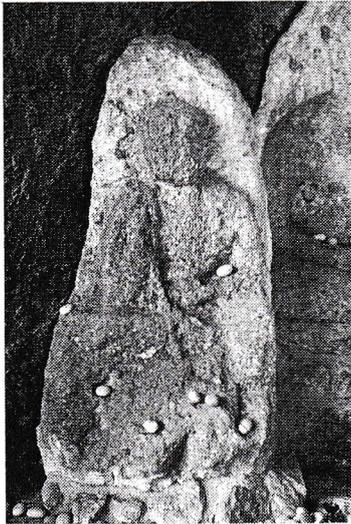
ひ伝へり。」とある。

また近世前期に白山宮の惣長吏澄意が表わした『白山諸雑事記』にも「妙法の石室」やかたがり地蔵のことが記されている。

ところでこのかたがり地蔵は、像そのものは、岩面に半肉彫りされ、顔面は薄く削られ、宝珠の頭部や宝珠が欠落している。岩座に坐る姿は、堂々としている。故桜井甚一氏は、この造像は鎌倉時代と推定されている。像脇に五輪塔が追刻されているが、これは明らかに後刻である。

このかたがり地蔵に小石を供えたと足の病気が治り、箸を供えれば歯痛が治るとされている。

23 波切不動堂内地蔵



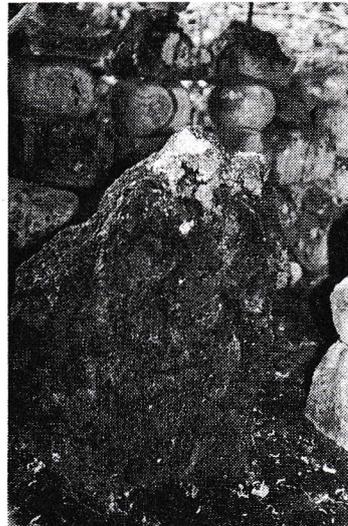
波切不動堂地蔵

これは鶴来町今町の波切不動堂内にある地蔵である。ここには波切不動尊と呼ばれる石仏と三尊仏がある。実は、かたがり地蔵と同じく、これらも舟岡山の崖壁にあった磨崖仏であった。三尊仏の中の、向かって左側にこ

の地蔵がある。

この三尊仏の中央と向かって右が如来形仏で、左側にこの地蔵がある。これも顔面が削られ、錫杖の頭部、宝珠が欠落している。これは、かたがり地蔵より造像の時代は大きく下る。

24 浄養寺地蔵



浄養寺地蔵

鶴来町白山町の真宗大谷派浄養寺墓地に、この地蔵がある。この墓地には五輪塔、宝篋印塔、板碑などの中世石造物が多くあり、その中にある。

これは、肩から上部が欠落し、錫杖、宝珠も欠落している。地元の話では、これも舟岡山の崖壁にあった磨崖仏といわれている。ところで鶴来町日向町の定力寺境内にも地蔵半跏像があるが、これはまだ実見していない。

おわりに

砺波地方で二二体、氷見地方で三六体、能登半島と加賀で二四体の明らかに中世石造物

の、地蔵半跏像を拝見することができた。

それらのすべて右手に錫杖を持ち、左手に宝珠を持つスタイルで、台座は、蓮台ではなく、岩座である。彫法は丸彫に近い厚肉彫であり、石材は、能登の一部や鶴来町のもので除くと、ほとんど白乳色のシルト岩質泥岩である。

これら七二体を拝見して、驚いたのは最も古いとされる鶴来町のかたがり地蔵の顔面が削られているように、多くのものも顔面が削られていた。私はこれは、幼い頃、テレビで見たあのシルクロードのバーミアン渓谷（アフガニスタン）の大磨崖仏の顔面が異教徒によつて破壊され、その慈眼が拝見できないことと同じではないかと思ったりした。このような推論とロマンがたくさんわき出てきたが、それは個々に検証していきたい。

（砺波市太田一七七〇）



能登・加賀の地蔵半跏像石仏

No.	名称	所在地	高・幅	石質	光背の状態	像容の状態
1	散田地蔵	羽咋郡志雄町散田	34・23	凝灰岩	舟形光背	顔面右半分が破壊
2	福水地蔵	羽咋市福水白山社	65・35	シルト岩質の泥岩	円光背	顔面右半分が削りとられ、宝珠、錫杖も欠落している
3	福水奥宮地蔵	羽咋市福水白山社奥宮	33・21	シルト岩質の泥岩	舟形光背	風化が進んでいる、顔面が薄く削られている
4	福野地蔵	志賀町福野気多神社	68・38	シルト岩質の泥岩	舟形光背	光背の右上部が無く、顔面が薄く削られ、宝珠、錫杖が欠落している
5	明正寺地蔵	志賀町百浦明正寺	49・34	凝灰岩	舟形光背	光背上部が欠落しているが保存状態は良い
6	相見神社地蔵	羽咋郡富来町相神相見神社	57・23	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態は良い
7	剣神社地蔵	珠洲市宝立町鶴島剣神社	43・23	シルト岩質の泥岩	円光背	宝珠、錫杖がやや欠落しているが、保存状態は良い
8	不動寺地蔵1	珠洲郡内浦町不動寺	61・38	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態は良いが、顔面が少し削られている
9	不動寺地蔵2	珠洲郡内浦町不動寺	41・26	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態は良いが、顔面が少し削られている
10	行延地蔵	珠洲郡内浦町字行延	110・100	凝灰岩	不明	一石の三面仏である積極的に破壊されている
11	行延堂内地蔵	珠洲郡内浦町字行延	28・23	砂岩	舟形光背	保存状態は良いが、光背の左上部が欠落
12	神道地蔵	鳳至郡能都町柿生神道	72・38	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態は良いが、顔面が少し削られ宝珠が無い
13	鮭尾地蔵	鳳至郡能都町鮭尾	39・30	シルト岩質の泥岩	不明	光背が無く岩座も欠落し顔面も削られている
14	別所地蔵	鹿島郡中島町別所	37・28	砂岩	不明	光背が欠落している
15	鳥越地蔵	鹿島郡中島町鳥越	60・36	凝灰岩	舟形光背	保存状態は良い
16	上出地蔵	鹿島郡中島町上出	46・42	凝灰岩	舟形光背	風化が進み、顔面が削られている
17	横田地蔵	鹿島郡中島町横田	37・32	凝灰岩	不明	首から上部が無い
18	海門寺地蔵	七尾市大田海門寺	66・32	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態はやや良い
19	上大田地蔵	河北郡津幡町上大田	62・37	シルト岩質の泥岩	舟形光背	保存状態は実に良いが、宝珠が無い
20	普正寺地蔵	金沢市普正寺町	57・34	灰白色の凝灰岩	長方形の石材	保存状態は実に良い
21	傳燈寺地蔵	金沢市伝燈寺町	60・61	凝灰岩	舟形光背	保存状態は実に良いが、顔面が少し削られている
22	かたがり地蔵	石川郡鶴来町白山町	300・230	凝灰岩	元磨崖仏であった	顔面が削られ、宝珠と錫杖の頭部が無い
23	波切不動堂内地蔵	石川郡鶴来町今町波切不動内	88・45	凝灰岩	元磨崖仏であった	顔面が削られ、宝珠と錫杖の頭部が無い
24	浄養寺地蔵	石川郡鶴来白山町浄養寺	75・58	凝灰岩	元磨崖仏であった	頭部、錫杖、宝珠が欠落している

※ 表中「高・幅」の、単位はセンチメートルである。

編集後記

▼今年の春は名残りの雪に二度三度と見舞われるなどして、春は名のみでいつまでも肌寒く、桜の開花もいつもよりはおそかったようです。なれど春は確実に廻り来て、氷見春秋も春の号を発刊する運びとなりました。今回から新たに大口昭夫氏に編集プレーンに加わっていただくことになり、編集子一同頼もしく思っています。

▼本号も又力作揃い。永森氏は著者渾人の「齋藤家の遺物と先祖」を完結された。氏の齋藤一族への深い思い入れと飽くこと無きその追跡に感動しきりである。網田氏の「氷見海岸の城砦群」は、隠れた史料・図絵を思う存分に駆使して、氷見湊、灘浦一带の「戦乱の中世」を活写してくれています。

▼齋藤氏の「唐津にあった藁台網」は、秀吉の朝鮮役を的をしばって、実地に名護屋、唐津の地を探查され、台網発祥の秘密を実証的に考究された論考です。大口氏の「淺野総一郎翁」は異色の論考で、翁その人の言行録（信条）を手懸りにその商魂、その生きざまを検証した力作。

▼村田氏の人物評伝は、いつもやわらかくあたたか味があります。その「龍水英堯管長さん」は「さん」付けで呼ぶのにふさわしい管長さんの人柄を、起承転結も面白く描いて好篇。谷内氏の「高志の歩み」は、氏が主宰する高

志俳句会の趨勢と自分自身の励みをかませた端正な叙述で、氏の人が柄が仄見えます。

▼氷見西光寺には「義霜門弟帳」の在ることは夙に知られていますが、今また藪波師はそれ以前の門弟帳を発見された。師の「尺伸堂入門帳」に接して、尺伸堂塾の伝統とその規模にすごいというより外はない。尾田氏は前号に引きつづき、「能登・加賀の地藏半跏像」を物された。石仏の一体一体を克明に見つめ、その表情、全容を讀とられる氣力に脱帽である。その像がそこに在る背景にも視点があてられていて面白い。

▼高西氏は長年に亘って調査研究、聞き取り聚集された年来の研究を論文に纏められた。その「氷見の雨乞い習俗」は水資源乏しく、天水に頼らざるを得なかつたかつての氷見の農村の苦悩と人々の哀感をこと細かに伝えてくれています。

▼天牌——正に聞きなれぬ名称であり、ものである。真宗寺院に安置されていたとは門徒であつても知る人はなからう。高峯氏の「天牌安置の意味と真宗」は、天牌安置に至った背景、また撤去の理念と真宗の教義の本質を論述して、その意味を解明された格調高い論考です。

▼橋本氏は、「ホトトギス」を視点に古典文学を情緒豊かに論ぜられました。その「ホトトギス文学史話」は題名からして、ロマンを感じさせます。氏の

本稿執筆の究極のねらいは越中国守大伴家持とそのホトトギスの歌にあるとか。次号が待たれるところですよ。

▼湊氏の「氷見郷土芸能振興に想う」は、氏ならではの語れない氷見の芸能文化草創期の逸話、挿話であり、同時に氷見芸能文化の今への苦言・提言でもあります。昭和二十年代初頭から発想豊かに氷見文化会を牽引して来た氏の口から出る話は、今では秘話、秘録と言つて過言でない。一層の健筆を期待します。

▼林氏は福野農業校卒業生の自負みなざる「福野農学校と氷見」の一文に、堺氏はなつかしくも又哀感溢れる「微用と我が家の馬」に、それぞれの少年時代をなつかしく回想された。雨池氏は「春秋昨今」で氷見春秋との関わりを、それに伴う人との出会を軸に、こねまたその喜びを回想された。

▼会誌のバックナンバーを希望される方が年に何名か居られます。特に創刊号を希望されるのですが、在庫はありません。就いては創刊号を譲つてよいと云う方があれば、編集部へ申出てくださいたく思います。

▼各位から早くに原稿を寄せていただきながら刊行ができました。次号からは今少し早く発行したいものと編集部一同自戒しています。これに懲りず次号の原稿を、またお早目にお寄せください。（上野）

34号原稿募集

○論考 氷見に関する歴史、民俗、文化、自然など広く一般的な研究

○小史 農・商・漁など各業、団体、個人等あらゆる分野の小史的なもの。共に原稿用紙（四〇〇字詰）十六〜二十六枚程度。

○小篇 随想、思い出、紀行文、伝説、伝承など。原稿用紙十二〜十六枚程度。

○資料 古い写真、古文書など興味ある未発表資料があればお寄せください。

◆いずれも、本会々則第二条の目的にふさわしいものである事。

◆しめきり 平成八年七月末日まで
宛先 〒935氷見市窪一三五九

上野 務宛
または、氷見春秋会役員まで

編集と発行 氷見春秋会

〒935-02 富山県氷見市中村一三七七

〒935-02 富山県氷見市中村一三七七
（橋本芳雄方）
頒価（税込込み） 六〇〇円

振替口座 0071316935

印刷 小間印刷株式会社